

木下竹次・重松鷹泰の『学習法』の授業事例研究

「発表者の『たぶん・でも』を聞いて、自分の『たぶん・でも・きっと』を見つける」

(奈良女子大学附属小学校 小幡 肇 氏)の授業事例を通して

蜂須賀 渉

教職実践講座

Takeji KINOSHITA and Takayasu SIGEMATSU's

Case Study of "the Way Learning"

Hearing "Maybe, But" from the Presenter, To Find "Maybe, But, Probably" of our own. Through the Case Study of Hajime OBATA who is in the Elementary School Attached to Nara Women's University.

Wataru HACHISUKA

Graduate School of Practitioners in Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1 『学習法』と言語活動

今日の教育が、「知識注入主義」「教育技術の方式化」「教材の構造化」に陥り、教育本来の精神を見失う恐れがあるとき、私は、木下竹次の「合科学習」、重松鷹泰の「奈良プラン」の精神を学び直す必要があると考える。

今回(平成20年)の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について(答申)*1」では、「教育内容に関する主な改善事項」の第一として「言語活動の充実」をあげ、次のように記されている。

各教科等における言語活動の充実は、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点である。(中略)

各教科等においては、このような国語科で培った能力を基本に、知的活動の基盤という言語の役割の観点からは、例えば、

・観察・実験や社会見学のレポートにおいて、視点を明確にして、観察したり見学したりした事象の差異点や共通点をとらえて記録・報告する(理科、社会等)(中略)

など、それぞれの教科等の知識・技能を活用する学習活動を充実することが重要である。

また、コミュニケーションや感性・情緒の基盤という言語の役割に関しては、例えば、(中略)

・体験したことや調べたことをまとめ、発表し合

う(家庭、技術・家庭、特別活動、総合的な学習の時間等)

・討論・討議などにより意見の異なる人を説得したり、協同的に議論して集団としての意見をまとめたりする(道徳、特別活動等)

などを重視する必要がある。(後略)

この「言語活動の充実」についての視点は、木下竹次、重松鷹泰の『学習法』に通じるものであると考えている。

2 木下竹次の合科学習

木下竹次は、奈良女子高等師範学校附属小学校主事であった大正8年から昭和15年までの期間に、『学習法』の礎を築き、全国に広めた。この『学習法』は、木下竹次の著書である「学習原論*2」「学習各論*3」に詳細に記されている。

この『学習法』について、木下は著書「学習原論*2」の自序で、次のように述べている。

(前略)学習は学習者が生活から出発して生活によって生活の向上を図るものである。学習は自己の発展それ自身を目的とする。(中略)学級の画一教育法を打破した自律的学習法は、いずれの学習者も独自学習から始めて相互学習に進み、さらにいっそう進んだ独自学習に帰入する組織方法であって、実に性質能力の異なったものは異なったように活動し、しかも、自由と協同とに富んだ社

会化した自己を建設創造しようというものである。(後略)

また、木下は、前出の「学習原論^{*2}」で、学習の要件として、次の4点をあげている。

- (1) 学習は教師指導の下で行われる。
- (2) 学習は整理された環境のうちで有効に行われる。
- (3) 学習は自ら機会を求め自ら刺激を与え、また自ら目的方法を立てて進行するところに成立する。
- (4) 学習の目的は社会的自己の建設であり文化の創造である。

「独自学習」「相互学習」を次のように述べている。

新学習材料に対しては学習は常に独自学習から始める。(中略)その相互学習が終わったならば再び独自学習に移って深刻な補充的学習をなすことが必要である。(後略)

木下の『学習法』は、彼の著書により全国に広がり、奈良女子高等師範学校附属小学校で実践された。奈良女子高等師範学校附属小学校における大正11年の参観者は10,684名、大正12年の参観者は20,512名、大正13年の参観者は21,539名にも及んだ。大正11年に創刊した機関誌「学習研究」は、現在も奈良女子大学附属小学校から継続発行している。

ところが、昭和12年の日中戦争以後は、戦時下であり、国粹主義、全体主義が台頭し、自由主義、個人主義は外来思想として排斥されるようになる。大正期以来の児童中心主義教育に対する批判が厳しくなってくる。

3 重松鷹泰の奈良プラン

重松鷹泰は、戦後の昭和22年から昭和27年まで奈良女子高等師範学校附属小学校主事として、「奈良プラン」という教育計画を確立した。教育の目標を「人間として強い人間」の形成に求めた。この「奈良プラン」は、当校の研究発表会や当校の機関誌「学習研究」で論じられている。

「奈良プラン」確立期の「生活カリキュラム構成の方法^{*4}」には、次のように記してある。

子どもは、十分なる相互切磋の結論として、学校に於ける子どもたちの生活を次の三つに分類して、そこにカリキュラムを構成していこうと決定しました。すなわち、次の三部面であります。

「しごと」

「けいこ」

「なかよし」

(中略)すべてを生活題目の中に包含させるというのを立て前としていた私どもは、私たちの教育の実情というものを深刻に反省した結果、そのようなことは、敢えてしようとするればもちろんできないことはないが、敢えてするという事は、かえって「しごと」本来の面目を失わせるものであるという考え方を採用しました。そこで「しごと」の中で自然に、すなわち必然的に発展させられるもの以外の、各種の能力 - (中略) - を、その時その時に特定し、一定の基準に照合して、修練させ発展させる生活の部面も必要であると考えました。これが「けいこ」であります。(中略)

「なかよし」は、子どもたちをして、自分たちの生活の場を、自分たちの手で形成させる部面というように考えています。これはいわば課外活動であって、狭い意味のカリキュラムの中には含められないかも知れません。しかし、いわゆる正課の活動の母胎であり、発展であります。(後略)

現在の教育を考えると、「活用」「知識・技能」「道徳」との関係性を見ることが出来る。今、必要とされている教育観そのものが「奈良プラン」にあると考えられる。

昭和27年の新学制実施により、奈良女子高等師範学校附属小学校は奈良女子大学文学部附属小学校として、「奈良プラン」を継承しつつ、新しく再出発した。

4 昭和52年の学習指導要領における合科・総合

戦後の高度経済成長に伴い、「子どもの生命力にあふれた生活」が奪われてきた。昭和52年の学習指導要領では「豊かな人間性の育成」が主眼とされた。その中で「低学年においては、合科的な指導が十分できるようにすること」とされた。

この学習指導要領の合科・総合の考え方の根拠となっている考え方について、「教育課程改革試案^{*5}」には、次のように記されている。

総合学習は個別的な教科の学習や、学級、学校内外の諸活動で獲得した知識や能力を総合して、地域や国民の現実的課題について、共同で学習し、その過程を通して社会認識と自然認識の統一を深め、認識と行動の不一致をなくし、主権者としての立場の自覚を深めることをめざすものである。(中略)

総合学習は、低学年向けのかつての合科学習と混同されがちであるが、幼い子どもの体験は未分化だから、分化した「教科学習」に入る前段階として、「合科」で学習させる発想と、「総合学習」

は異なる。「合科」はあくまで各教科の系統的知識の習得が目的で、その手段として効率化するために、子どもの生活リズムに合わせて、統合して教えようとする。総合学習は、生活課題そのものの学習という性格をもつ。したがって「合科学習」は、高学年では分化するから消滅するが、総合学習は、いよいよ高学年において真価を発揮することになる。(後略)

総合学習の考え方が、しだいに学習指導要領に取り入れられるようになってきた。

5 平成10年の学習指導要領における総合的な学習の時間

平成元年の学習指導要領における生活科の導入に続き、平成10年の学習指導要領からは、総合的な学習時間が創設された。

総合的な学習の時間については、「小学校学習指導要領(平成10年)*6」の「総則」の中で、次のように記されている。

1 総合的な学習の時間においては、各学校は、地域や学校、児童の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものとする。

2 総合的な学習の時間においては、次のようなねらいをもって指導を行うものとする。

(1) 自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。

(2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。

3 各学校においては、2に示すねらいを踏まえ、例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うものとする。

(後略)

ところが、「総合学習」の本来のねらいが十分に理解されず、多くの学校において、「社会体験活動」「生産活動」「発表活動」等の活動自体が注目され、「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度」が培われなかった。これが、「学力低下」の一因とも言われている。

奈良女子大学文学部附属小学校は、平成16年の国立

大学の独立行政法人化に伴い、国立大学法人奈良女子大学附属小学校となった。

6 平成20年の学習指導要領からの総合的な学習の時間

PISA2006の結果や、平成19年度全国学力・学習状況調査により、子どもたちの学力について、基礎的・基本的な知識や技能を実生活で活用する能力や、学習に対する意欲や態度について課題があることが明確になった。

前出の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について(答申)*1」では、「その課題」について、次のように記されている。

・総合的な学習の時間の実施状況を見ると、大きな成果をあげている学校がある一方、当初の趣旨・理念が必ずしも十分に達成されていない状況も見られる。また、小学校と中学校とで同様の学習活動を行うなど、学校種間の取り組みの重複も見られる。

・こうした状況を改善するために、総合的な学習の時間のねらいを明確化するとともに、子どもたちに育てたい力(身に付けさせたい力)や学習活動の示し方について検討する必要がある。

(後略)

これらを踏まえた上で、総合的な学習の時間については、「小学校学習指導要領(平成20年)*7」の「第5章」で、次のように記された。

第1 目標

横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。(中略)

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。(中略)

(2) 地域や学校、児童の実態等に応じて、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習、探究的な学習、児童の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うこと。(中略)

(5) 学習活動については、学校の実態に応じて、例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題についての学習活動、児童の興味・関心に基づく課題についての学習活動、地域の人々の暮らし、伝統と文化など地域や学校

の特色に応じた課題についての学習活動などを行うこと。

(中略)

2 第2の内容の取扱いについては、次の事項に配慮するものとする。

(1) 第2の各学校において定める目標及び内容に基づき、児童の学習状況に応じて教師が適切な指導を行うこと。

(2) 問題の解決や探究活動の過程においては、他者と協同して問題を解決しようとする学習活動や、言語により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動が行われるようにすること。

(3) 自然体験やボランティア活動などの社会体験、ものづくり、生産活動などの体験活動、観察・実験、見学や調査、発表や討論などの学習活動を積極的に取り入れること。

(4) 体験活動については、第1の目標並びに第2の各学校において定める目標及び内容を踏まえ、問題の解決や探究活動の過程に適切に位置付けること。

(後略)

しかし、総合的な学習の時間における理念の実践のためには、学校の高い教育力、指導者の高い授業力が必要である。多くの学校では、先進校の学習形態を模倣するにとどまるを得ない状況である。そのため、総合的な学習の時間が形骸化し、体験活動や発表活動の場となってしまふことが危惧される。

7 小幡肇氏(奈良女子大学附属小学校)の授業

奈良女子大学附属小学校は、木下竹次、重松鷹泰の理念を受け継ぐ教育実践先進校の一つである。筆者は、奈良女子大学文学部附属小学校(文部教官)教諭として、平成7年4月から平成13年3月までの6年間、小幡肇氏(文部教官教諭)とともに、小学1年から小学6年まで持ち上がって指導した。(1学年2学級：月組・星組)

小幡氏は、筆者より早い平成2年から現在に至るまで、奈良女子大学附属小学校で教鞭をとっている。筆者が認識している『学習法』の基盤は、小幡氏を中心に教授していただいた。

小幡氏は、子どもをとらえた教材の仕組み方が素晴らしい。また、日常的に子どもを鍛える手法が効果的である。最近の授業スタイルは、「『気になる木』の『はっぴ』をふやそう」であり、多くの研究者の研究対象となっている。

小幡氏の学習展開の手法は、小幡氏の著書「やれば出来る!子どもによる授業*8」「そこが知りたい『子どもがつながる』学習指導*9」に詳細に記されている。

8 小幡肇氏の授業事例

(1) 共通テーマと個人追究テーマ

小幡氏は、平成7年の「阪神淡路大震災」の風化を危惧し、防災意識等を総合的にとらえることを目的として、「阪神大震災が教えるもの」という共通テーマで学習を進めている。

小幡学級では、個人追究テーマを、担任の小幡氏と相談しながら決定する。その際、小幡氏は、子どもの考え・希望を最大限尊重した上で、次のようなことを考慮しながら、この子にとっての価値ある「個人追究テーマ」となるようにしている。

- ・独自学習、相互学習、さらに深化した独自学習に耐えうる追究テーマであるか。
- ・学級の他の子どもと視点が違い、かつ、かかわり合える追究テーマであるか。
- ・自分の考えを進めることができるだけの、十分な資料を得ることができるか。

小幡氏は、この個人追究テーマ決定に際して、細心の注意を払っている。子どもから、共通テーマに沿った、大まかな子どもの考え・希望が出されると、小幡氏は、すべての子どもの個人追究テーマを把握した上で、その子がいちばん輝くことができる個人追究テーマを考える。その子独自の視点があれば、最大限尊重して援助する。そして、子ども自身で個人追究テーマを決定する。

(2) 独自学習

子どもたちは、個人追究テーマに沿って、独自学習を進める。小幡氏は、「どのような視点で考えを進めていけばよいか」を、個別にアドバイスしている。また、見学・インタビュー・資料等について、段取りや資料の集め方を力強く指導する。

個人追究テーマなので、全員で同じところに見学等に行かないことが多い。今回の実践は、6年生であること、また、持ち上がりの学級であることから、5年生時の最後に個人追究課題を決定し、春休み等を利用して、見学等は個人で進めるようにした。小幡学級では、このような経験を数多くしているので、高学年になれば、このような活動は十分にできる。

6年生の4月になってから、それらの資料等を参考にしながら、独自学習を進めた。小幡氏は、子どもの独自学習の進捗状況を把握し、力強く指導した。独自学習を進めていき、見学・インタビュー等が不十分であったことに気がつけば、子ども個人で再見学・再インタビュー等を行った。

独自学習の中で、次の相互学習の発表準備を進める。小幡氏は、この発表準備でも、個別に力強く指導する。

(3) 相互学習

小幡氏の相互学習の授業スタイルは、十分な独自学

習の後、個人追究テーマを学級全員で考える時間を、子ども一人に1時間とる。

授業の冒頭で、発表者が個人追究テーマの発表をする。気になることの問題提起をする。基本的な文型は、「・・・(事実)・・・だけど、なんで・・・(疑問)・・・かな?」である。そして、自分が調べた内容をもとに、自分の考えを「たぶん」「でも」「たぶん」(「でも」「たぶん」)で発表する。自分の主張(考え)を述べた後、「自分の考えを、もう一度客観的に見直す」ことを意識的にさせている。そして、「きっと」を見つけるのである。

授業の冒頭の個人追究テーマの発表は、問題点が明確になるように、また、内容が理解しやすいように、模造紙の発表だけではなく、「寸劇」「インタビュー劇」「実験(実演)」など、多様な方法をとる。発表者一人では人手不足なので、お手伝い(役柄)等が必要な場合は、数人がお互いに協力し合うことが多い。

今回の授業は、H君の「インタビュー劇」による問題提起であり、3名の子どもが協力をしている。

授業の司会進行は発表者であり、おたずねには、発表者が答える。意見であれば、お互いに考えを述べ合う。この場合も、司会進行は発表者である。そのため、相互学習では、小幡氏はほとんど登場しない。焦点化や切り返しが必要な最小限の場面のみ発言する。通常は、授業の最後で、総括を行うのが、大きな「教師の出」である。これは、奈良女子大学附属小学校の基本的な授業スタイルである。

今回の授業では、小幡氏は、子どもの「報道優先」の考えに対して、あえて、「けがをして助けを必要としているのが、自分の家族だったとしたらどうでしょうか。」という切り返しの発言を行い、子どもに一つの視点を示していた。

(4) 小幡氏の板書

小幡氏は、相互学習の際、個人追究テーマの発表と問題提起から、子ども同士の発表まで、細心の配慮をしながら板書を進める。

問題提起は、黒板の上端全面を使って記述する。発表者と発言者の内容は、「たぶん」「でも」をキーワードにして、黒板全体にまとめる。関連性や視点の違いが見やすいように記述する。子どもは、その板書をもとに、もう一度振り返りながら考えを深めることができる。

発言者が多い場合は、小幡氏が発表内容を吟味した上で、黒板に記述するスペースを確保(指定)し、発言者自身に板書させている。このことにより、小幡氏は、常に、学級全体の発言の流れを把握することができる。

小幡氏の色チヨークの使い分けは、概ね、「白色が事実」「黄色が考えたこと・わかったこと」「赤色が疑問点・話し合いたいこと」である。

(5) 今回の授業設定

期日

平成20年 4月24日(木) 第3校時

授業学級

奈良女子大学附属小学校 第6学年月組

授業者

小幡 肇 氏(第6学年月組 担任)

(6) 今回の授業の流れ(概要)

【H君の問題提起】

放送局神戸支局で働くTさんを調べたH君
気になること

Tさんは、カメラマンとして人助けをするよりも、カメラを回して世の中の人々に阪神大震災の恐ろしさや苦しさがどんなものかを伝えることが自分に与えられた使命だと思った。とおっしゃったけど、なんで人助けより報道することのほうが優先だと思ったのかな?

理由

実際、被害に遭われた人にとっては、(報道は)何一ついいことなんか無いと思っていたかも知れないのに、Tさんは報道のが大切だと思ったのかな? と思ったから。

たぶん

Tさんは、報道することによって全国から救援物資が届けられたいとしたので、報道することによって、情報が伝わるし、災害にあった人のためにもなると思ったからかな?

でも

目の前に、人ががれきをよけたりして、救援活動をしていたりすると、それを見たら、そこを報道したりするのは気が進まないし、もしかしたら、撮影しようと思ったりしても、被害にあった人に撮影を拒否されたりするんじゃないかな?

たぶん

あまりにも大きすぎる地震を初めて体験したので、記者の人や上司の人に連れられて報道するしかなかったんじゃないかな・・・

【相互学習】

おたずね1

どういうところから、救援物資が届くと思いませんか?

H君1

報道することにより、全国から救援物資が届くと思います。

たぶん1

Tさんは、最初は人助けをしようと思ったと思う。だけど、報道をしたら、全国に広まると思ったと思う。だから、一人の人助けよりも、たくさんの人助けをしたほうがいいと思ったと思う。

おたずね2

私のおじさん、おばさんの話では、報道の映像で災害の状況が分かり、役だったと言っていました。H君は、どうして報道には何一ついいことなんか無いと思ったのですか？

H君 2

今、がれきの下で生死が分かれる人にとっては、後から結果が出る報道では、よいことにならないと思ったからです。

おたずね 3

カメラマンの仕事をしていても、人が助けを求めていたら助けたと思うけど、H君はどう思いますか？

H君 3

報道しながら人助けはしていないと思います。救助には、携わっていないと思います。

たぶん 2

Tさんは、カメラマンにしかできないことがしたかったからだと思います。確かに、短い時間で人の生死が分かれる状況だったと思います。しかし、人助けや救援物資を届けることは、カメラマンじゃなくてもできます。反対に、カメラマンの仕事は、カメラマンにしかできません。だから、Tさんは、カメラマンとしてカメラマンにしかできない仕事をしたと思います。

おたずね 4

Tさんは、がれきの下で生死が分かれる人を、実際に見たということですか？

H君 4

見ていません。でも、そばに助けを求める人がいたら、助けたと思います。放送局のスタッフの中には、実際に助けた人もいるそうです。このことは、放送局の中でも議論になったそうです。

たぶん 3

Tさんはカメラマンだから、人の救助は自衛隊の人に任せて、役割分担のことを考えてカメラを回したと思います。

たぶん 4

自分にしかできなかったことを優先させていくと、報道することのほうが大切だと思ったと思います。

【授業の総括】

小幡氏 1

けがをして助けを必要としているのが、自分の家族だったとしたらどうでしょうか。

小幡氏 2

カメラマンとして報道することが自分の使命だと思ったTさん。しかし、今、がれきの下に生死が分かれる人がいる。Tさんの悩み。そして、報道することを優先したという結果。これらのことから、自分の「きっと」を見つけて書きます。「たぶん」「でも」「きっと」を使って書きます。

(7) 授業のまとめ

子どもは、本時の発表者の問題提起について、友だちの発言を参考にして、「たぶん」「でも」「たぶん」「でも」を意識して考え、最終的に、自分なりの「きっと」を見つけ出す。

小幡氏の昨年度まで授業では、「『気になる木』の『はっぱ』をふやそう」であったが、本年度からの授業では、「発表者の『たぶん・でも』を聞いて、自分の『たぶん・でも・きっと』を見つける」とし、思考の流れを明確にしてある。

授業の総括では、本時の授業で考えた「自分の『たぶん・でも・きっと』」を、原稿用紙に感想文として書く。子どもの考えをまとめながら書くスピードは速く、540字の原稿用紙の最終行まで、学級全員が10分以内に記述することができた。

(8) 子どもの感想文(抽出)

感想文 1

なんで、人助けより報道することのほうが優先だったと思ったのかな？

私はカメラマンとして、少しでも伝えることが使命だと思うし、家族の人も会社に行ってもOKと言って下さったと書いてあるので、報道することを優先したんだと思います。でも、注意しないといけないことがあると思います。

それは、今、がれきの下で生死が分かれるというときです。救助している人にインタビューして、もしも間に合わなかったりしたら、報道する人も悪くなると思うので、街がどういう状況かだけ映したりしているんだと思います。

Tさんは、あまり自分でやることがないと言っていたけれど、カメラマンというたくさんの人の命を救えるかも知れない大切なことのできるカメラマンでよかったと、Tさんは思ったと思います。

でも、きっと結果的には、他の人にインタビューしないといけないと思います。街の状態だけでは、どこにどうすればよいかなどがわかりにくいから、そういうインタビューもしょうがないのだと思います。一人の命とたくさんの命だったら、たくさんの命を大事にするために報道しないといけないからでは？ それに、他の住民の人も救助をしているかも知れないから、まず報道を優先したんだと思います。

感想文 2

なんで、人助けより報道することのほうが優先だったと思ったのかな？

たぶん、Tさんは、「カメラマン」という貴重な仕事をしているのだから、報道しようと思ったのだと思う。「カメラマン」として、やらなくてはならない使命があったのだと思います。自分がカメラマンになった以上は、その仕事をやらなければいけないと思います。

でも、がれきの下で、あと少しで生死が分けられる、

という人を助けることができないということが問題です。1分でも、1秒でも早く助けないといけないので、協力して助けなければいけません。人々が協力し合っ
て助けているところをカメラを持って撮影するのは、もうしわけない気持ちになります。後から返ってくる結果より、その場での結果のほうがいいです。実感がわくので。

でも、自分に与えられた使命があります。目の前にいる人しか助けることができません。その一人を助けている間にも、他の人は苦しい思いをしていなければなりません。

でも、報道すると、一度にたくさんの人を助けることができます。それでも、すべての人を、一人残らず助けることはできません。

このことをふまえて、カメラマンとして報道をしていたのだと思います。私だったら、人助けをします。(できたら、両方がいければ。)

9. 授業事例研究のまとめ

子どもの感想文にもあるように、子ども自身が、H君の「なんで、人助けより報道することのほうが優先だったと思ったのかな？」という「気になること」を自分の問題としてとらえ、葛藤しているようすが伺える。小幡氏の焦点化した「板書」により、子どもが多く
の事実や語彙を巧みにあやつり、「たぶん」「でも」「きっと」で考えを巡らすことができている。

木下竹次・重松鷹泰の流れを受け継ぐ奈良女子大学附属小学校の『学習法』は、優秀な実践者により伝統的に引き継がれており、子ども自身が伸びる教育が効果的に行われている。これは、学校全体の継続的な取り組みによるところが大きい。

しかし、一般の公立小学校が、短期的な目標により、形式的に『学習法』を真似ても、うまくいかないこと

が多い。奈良女子大学附属小学校では、全教官の共通理解のもと、「子ども主体の活動」が、全校的に実施されている。「なかよし」活動も、それにあたる。

また、その学年の子どもを持ち上げて継続的に指導することを基本としている。このことは、その子に
応じた長期的な目標が設定でき、きちんとした指導を継続することができる。私も、小学1年から小学6年
まで持ち上げて指導した。

あらためて、奈良女子大学附属小学校の各教官が、当然のこととして行っている日常的な指導に注目する必要がある。「朝の元気調べ」「毎日の日記」をはじめ、各教官が附属小学校の伝統的経験と実践的経験・感
覚的経験を融合して生み出したものである。

これらの日常的な指導については、別の機会に論じることにはしたい。

主な参考文献

- 1 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について(答申)』平成20年)
- 2 木下竹次『学習原論』(目黒書店 大正12年)再版 中野光編(明治図書 昭和47年)
- 3 木下竹次『学習各論』(目黒書店)(上巻)大正12年、(中巻)昭和3年、(下巻)昭和4年 再版(玉川大学出版部 昭和47年)
- 4 文部省教科書局実験学校連盟編『生活カリキュラム構成の方法』(六三書院 昭和24年)
- 5 中央教育課程検討委員会『教育課程改革試案』(昭和51年)
- 6 文部省『小学校学習指導要領』(平成10年)
- 7 文部科学省『小学校学習指導要領』(平成20年)
- 8 小幡 肇『やれば出来る!子どもによる授業』(明治図書 平成15年)
- 9 小幡 肇『そこが知りたい「子どもがつながる」学習指導』(大阪書籍 平成19年)

(2008年9月3日受理)